
時の魔術師

M i c h e l

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

時の魔術師

【コード】

N2393E

【作者名】

Mich el

【あらすじ】

”もろともにあはれと思へ山桜、花よりほかに知る人もなし”桜の花の他に心を通わす人がいないなんて、そんな事ないよな。笹原隆太の自称”親友”村田は小さくそうつぶやいた。星空の中を走るシルバーメタルの車、海をすくう四人の海女、そして、桜吹雪の中に消える時の守人。時の魔術師〜春夏秋冬、完結編。第4話〜春〜より

く冬く (前書き)

時の魔術師、四部作(春夏秋冬)の”冬”です。順不同ですが、残りの”春””夏””秋”も順次掲載してゆくつもりです。

く冬

私の教室におかしな男子がいる。それも、すぐ隣の席に。
見た目はそんなに悪くない。黙って座っていれば、俳優の妻夫木
クんに、ちよつと似てる。

ささはら りゅうた
笹原隆太

外は雪。こんな日には学校よりも、家のコタツでぬくぬく眠って
いたい。

でも、今って授業中でしょ？笹原は、何かを机から自分の膝に出
したかと思うと、缶切り（これを持っているのも不思議）でキコキ
コ、開け出した。

え？マグ缶？

あつけにとられて、見つめていたら

「食つ？」

私の視線の中で、笹原はにこやかに笑うのだ。

「い、いい……」

「あつ、そう。なら、いただきます」

悪びれもせず、マグ缶を食す。お箸まで持ってきてるの？

こいつって、給食の時間にふらりと登校してきたり、2時間目に
はもう姿がなかったり、もう、やりたい放題。

あんたのせいで、今の数学の問題、先生の解答解説が、ちつとも
頭に入らなかつたじゃないの。中二の成績だつて内申に響くんだけ
らね。

* * *

「ねえねえ、美夏、今日やる？ターゲット決めた？」

2時間目が終わると同時に、友達のゆうちゃんが声をかけてきた。

「うーん、まだだけど……」

ちらりと見た隣の席。授業中はマグロ缶に夢中で、休み時間は睡眠の様子。いつたい、学校に何しにきてるんだろ？

「笹原隆太にする」

私は、隣に聞こえないように声をひそめて言った。

「えっ、超変わり者だよ」

「いいの。おもしろそうじゃない」

“うそ告”って知ってる？最近、私たちの悪友間で、密かに流行っている遊びなんだけど。

やり方は簡単。ターゲットの男子を決めて、“告白”するだけ。でも、それは、“嘘”。

……で、後で嘘だつてばらしてやった時の小気味良さ。

「笹原隆太がいい」

後で、彼の靴箱に手紙を入れよう。内容は簡単明瞭。

“前から笹原君の事が気になっていました。放課後、屋上で待ってます。石井美夏”

後ろめたくない？“うそ告”なんて、人の心を傷つけるだけだよ。心の中で誰かが私に問いかける。

べつにいいの。こんな事くらいで傷ついたなんて、思う方が弱いんだ。

* * *

放課後の屋上

笹原遅いな。呼び出したのはいいんだけど、寒いよ。屋上なんか指定するんじゃないかった。

ほつつと息を吐いてみる。白い息。雪は止んだけど、心の中には白い靄がかかっている。

ほつつとまた、白い息。

あれっ、笹原？

「ごめん。手紙くれたの、お前？」

いつの間に現れたの？ちっとも気づかなかった。

「あ……う、うん」

「……で？」

「……で？って、あの、だから、笹原君の事が前から気になって、それで、話を聞いてもらいたくて……」

「あっ、マグロ缶の事か？隣で食うなとか」

「ちがうってばっ！」

「……なら、何なんだよ……？」

さすがに鈍そうな笹原でも、少しは手紙の意味を理解しているよ。うで、バツが悪そうに視線を私からはずした。ちよっと、ほくそえみたくなる瞬間。それって、多少、期待してる？

「あの、前から私、笹原君が好きだったの」

“うそ告”完了！屋上の隅で隠れて見てる、ゆうちゃんにVサイン

ンを出したい気分。

でも、笹原の反応はとて、とても以外だった。

ほづつと息を吐く、息を吐く。白い息、白い息……

「そんな事、言われたの、初めてだ」

「……」

「今日って寒いよな」

また、ほづつと……白い息

* * *

え？何、ここ、何処？

入道雲と青い空。

緑の木々を通り抜ける木漏れ日。

川の音。堤防を歩く二人の男女。

どこかで見た景色……

夏休み、これって今年の夏休み？！

それは、一瞬の映像。

私と……好きだった……私の先輩。

「……つきあってくれませんか」

「悪いけど……」

「お友だちからで、いいんです」

「ごめん」

「何で？」

「……俺、石田の事あんまり好きじゃないんだ」

「えっ？」

いつも、私に笑いかけてくれた優しい先輩。

「おまえ、しつこいよ」

封印していた苦い思いが、私の心を突き破る。

* * *

「お、おい、何で泣いてんだよ？」

寒い放課後の屋上に座りこみ、涙がとまらない。横にいるのは笹原？お願い、顔を覗き込むのは止めて。

「ごめんなさい。ごめんなさい。嘘だった……笹原、好きだなんて

……嘘ついた」

はあ……と一息を吐き

「泣くなよ。“うそ告”されて泣きたいのは、こっちなのに」

そつだ、とっておきの物があるんだ。笹原は、本当に弱りきった顔で、リュックを開くと、こう言った。

「桃缶食べるか？」

* * *

「美夏！どうしたの?!」

血相変えて、走ってきたのは、“うそ告”を見ていた、ゆうちやん。

「笹原！あんた、美夏に何言っただの!」

「知らないよ、勝手に泣き出したのは、石田の方だ」

「そうだ、俺も見てたぞ！悪いのは石田だ！俺だって、先週、やられたんだ。“うそ告!”」

突然、飛び出してきた笹原の親友？村田は、鬼の形相で“ゆうちやん”を睨みつける。

「もう、止める、止める！ほら、みんなで気をとりなおして……食べるぞ、“桃缶”!」

ふつと一つ息を吐くと笹原は言った。

「俺はテストの答えをいつも間違える。何でか教えてやろうか？忘れるからだよ。でも、それって当たり前の事なんだ。人間は忘れる、いや忘れられる。それってすごい機能なんだ。だから、俺はテストの点が悪くても気にしない」

私、もしかして、なぐさめられてる？よく分からない彼の台詞。

笹原隆太って、本当におかしな奴。

ほろほると、また、雪が降り出した。

「今日は、寒いよな。本当に寒いよな……」

でも、季節が変われば、また、暖かい日が来るんだよ。

【時の魔術師】
〜冬〜
完

く秋く

高度7700m、第8キャンプ、北壁ルート。

最悪の吹雪と嵐、地球上に14座しかない8000m級の山の一つ、世界第二の高峰、K2。

その頂上アタックを目前にして、方角を失い、視界をなくす。

手の中にまだ残っている、走っていったザイルの感触。谷底に落ちたかったパートナー。

若手登山家のホープとして名を馳せてきた俺“山下慶一”の強運もついに尽きる時がきたのか。

急な氷壁の斜面に一人取り残され、途方にくれる。

“山で死ぬなら本望”

それは、頂上を極めた人間の言う言葉だ。

俺は、まだ、見ていないんだ。

超然たる聖域、K2の頂を。

* * *

東北、神室山。高度1365m。

「おい、隆太はどこへ行った？」

笹原隆太の親友（自称） - 村田は、半ばあきらめ気分で辺りを見まわした。

青い空、白い雲。

奴が“秋山登山”に参加した事でさえ奇跡に近い。ましてや、こんな気持ちのいい日に、ともに学校活動をやるわけないよ。

「隆太あゝ！焼き芋できたぞ。だから、出てこいよあゝ！」

中2の俺たちの、テーマは“自然に溶け込もう”

山小屋の裏での“焼き芋”作りと“自然に溶け込もう”がどう繋がるのか、さっぱり、わからなかったが、笹原隆太が登山に参加した理由があるとしたら、“それ”としか考えられなかった。

奴の好きな物は、学校給食。嫌いな物は学校活動！

“焼き芋”も学校給食なのか？

はなはだ、疑問ではあったが、隆太を呼び寄せるくらいの効果はあるはずだ。

「また、行方不明？笹原って協調性ゼロ。同じ班になった私たちの苦労も知らないで」

クラスメートの石井美夏が、膨れっ面をして言った。

「あいつって学校をなめてるんじゃないの」

と、その友人のゆうちゃん。

「……せっかく、うまそうな焼き芋ができたのになあ」

「村田は、あいつに甘すぎるよっ！」

と、怒りながらも三人は、隆太が戻って来てはいないかと、きよるきよると辺りを見渡した。どーでも、いい奴なのに、何故か傍にいる方がいい。

村田が、仕方ないな。と焚き火から取り出した焼き芋のアルミホイルに手をかけた、その時だった。

「おっ、いい匂い！」

手に栗の実をいっぱい抱えた、笹原隆太が現れた。

「隆太、お前、どこに行ってた!？」

「聞いても無駄な質問。」

「ちよつと、栗拾い。これもパチツと焼いてもらおうと思って」

爽やかに微笑んで、ばらばらと栗の実を、焚き火の中へ放りこむ。
パチツ、パチツと弾ける音

だが、突然

パーンツつと、強く弾けた毬しいがが笹原を直撃した。

「あつー!!」

やばっ、俺、飛ばされるっ！

* * *

K2。吹雪はまだ、静まる気配も見せない。

「とりあえず、テントの入口から雪が舞いこむのだけは阻止しなければ」

風がテントを引き裂いたら、もうどうしようもない！

若手登山家、山下慶一は、冷たささえ感じなくなった手で、懸命にテントを押さえこんだ。

テントを押さえるペグが、吹き飛ばされた時、山下は狂おしげにその方向を見た……だが、

「……お前……誰だ？」

「俺？」

ジャージ姿の少年が、テントの隅にちよこんと座り込んでいる。

「笹原隆太。中学2年」

少年は、照れたような笑いを浮かべ、そう言った。

……この世界最高所に、中学生？！

山下は、妄想を吹き飛ばすかのように、2、3度、頭を横に振った。

だが、

「ここ寒いなー。おっさん、ここで何してんの？」

笹原隆太は、屈託なく笑う。

「何してんのって？それは、こっちが言いたい台詞だ！ここは、世界第二の高峰、K2だぞ」

「えっ、K2ってエベレストの次に高い山の？やばっ。そんな所まで飛ばされてたのか」

まいったなと、隆太はテントの端をめくり、外の景色を覗き込もうとした。

「や、やめろっ！テントをめくるなっ！」

ところが、

吹雪は嘘のように静まり、西から回り込んできた太陽が山の雪肌を、オレンジ色に染め上げていた。

K2の夕暮れ。羽衣のような薄い雲が、長くたなびいている。

「すごい、すごい！こんな絶景、初めて見た」

一瞬、はしゃぐ少年が姿が山の景色と重なりあった。稜線の向こうに沈んでゆく太陽にとり込まれるかのように。

山下は無意識に、隆太の首ねっこを引っつかんだ。

「さっさと、中に入れ！お前、そんな格好で外にいたら、凍傷になっって手足の指を全部なくすぞ！」

「馬鹿げてる。まったく、信じられない……ジャージでK2に登頂？学校の遠足じゃないんだぞ」

山下は自分のリュックからヤツケを引き出し、それでも着てると、隆太に放り投げた。

「あ、俺、今日は遠足だよ。秋山登山。“テーマは自然に溶け込もう”」

「……」
「せっかく、村田が“焼き芋”作ってくれたのに、食べそこねたなあ。ちえ、思い出すと、腹がへってきた。おっさん、何か食うものない？」

「おっさんは、やめろ！俺には山下慶一って名前があるんだ。あいにく、食料はほとんど、雪崩で流されてしまった。リュックを探れば、非常食の残りくらいはあるかもしれないが……」

えっ、困ったなあ。と隆太は自分のポケットをこそこそと探りだす。

栗の実、ブナの葉、鉄釘、そして、ぴよこんと飛び出したアオガエル。

「お前のポケットは、地球の裏にでもつながってんのか？！」

どこの登山家が、高度7700mでアオガエルを見るんだ！？あきれ返る山下を気にもせず、隆太はうれしげに笑った。

「あつた、あつた。おやつにとっておいたチョコレート。えーっと、俺と、おっさん……山下だっけ、それと……」

少し、俯いて隆太が言った。

「あなた、一人？」

「今……はな」

「今はって？」

「俺のパートナーは、北壁の割れ目の深い谷底に……落ちていった」

山では弱気になることは、禁忌だ。くじけた心では、気が遠くなるような雪渓を乗り越える事はできない。

「まだ、日があるうちに、このテントの周囲を見にいってくる。うまくルートが見つかれば明日は下のキャンプ地におりれるかもしれない。」

山下はわざと明るい声で言った。そして、お前はここを絶対に動くな、隆太にそう言い残すと、外へ出て行った。

「あゝあ、ここ、退屈だよな……」

隆太は、少し頬を膨らませると、ごろんとテントに横になる。

さわさわと外の雪がきしむ音

あのおっさん、このままだと、死ぬな……

* * *

「まいったな、ここまで積雪があるとは……」

山下は口を真一文字にくいしばった。

膝上まですっぽり、雪に埋もり身動きがとれない。山の上部ではまた、風が激しく舞いだした。

耳元をびゅうと、風が通り過ぎた時、

パキッ

氷の裂ける音がした。

「しまった！クレバス（氷の裂け目）に……」

驚く間もなく、山下は積雪で隠されていた、その落とし穴に

引きずり込まれていった。

真つ暗な奈落到落ちて行く。だが、突然、開けた明るい景色に目をみはる。

「ここは……？」

青い空、白い雲。

がさごそと、手を伝わってくる落ち葉の感触。

“俺、今日は遠足だよ。秋山登山”

隆太の言葉が頭をよぎる。

山下は思わず笑みを浮べた。差し迫った現実から、一瞬、目をそらしたい衝動にかられたのだ。

だが、

「馬鹿な！K2の雪と氷と風は幻なんかじゃない。俺を騙すのはやめろっ！！」

再び吹雪に閉ざされた雪稜で、山下は天を仰いだ。

“ちえっ、何でもどってきちまうんだよ”

風がその足元の雪をふわりと舞い上げた。

一面の白い世界が強風にさらされ、激しく揺れうごいている。

もう、無理だ。これでは一步も動けない。

山下は、何かを諦めたかのように、その場に膝から崩れおちた。だが、岩とは違う硬い感触を手元に感じ、はっと、そちらに目をむける。

これは、あいつのピッケル……？

谷に落ちていったパートナーの。

その時、一瞬、途切れた雪の間から、頂上付近が垣間見えた。

K2の聖なる頂……何故、お前は俺たちを拒むんだ！

再び視界は閉ざされ、日は暮れて、闇までが近づいてくる。

俺は、ここで死ぬのか……雪に埋もれて、たった一人で……。

だが、

“一人じゃない……んだよなあ”

頭上から突然響いてきた声。信じられないくらいK2に不釣り合いなジャージ姿の少年

笹原 隆太……

「お前、何でそこにいるっ？ついて来るなと言ったのに！」

「だって、秋山登山に誘ったって、来やしない。だから、教えてやるうと思ってる」

「何っ？」

「雪崩が来るんだよ」

音もなく波のような雪が流れてきた。

そして、隆太は鮮やかに笑った。

“ 山が人を拒むものか。山はそこに居るだけだ ”

* * *

「隆太、遊んでないで早くやれよ。終わってないのは、俺たちの班だけなんだぞ」

またまた、うるさい村田がやってきた。

学校の社会の時間。今日の課題は、秋山遠足のレポートをパソコンでまとめる作業。

「ちよつと待てよ。今、ネット小説読んでるんだ」

「はあ？それって、おもしろいんか。読みたいなら休み時間に読めよ。時間がないんだから、さっさと、画面もどせ」

隆太からマウスを、奪い取った村田は、あれ？とパソコンのトップニュースに目をやった。

「先日、世界第二の高峰K2（8,611m）の北壁で雪崩が起き、登山中の日本山岳隊員、佐伯数馬、山下慶一が巻き込まれた模様。死亡を確認……ま、死んでも、仕方ないわな。そんな高い山に登るんじゃ」

その時、担任教師に付き添われ、教室に見知らぬ男が入ってきた。
「今日から来てもらった、産休の先生の代わりの先生を紹介するか
らみんな、着席」

えっ！

何っ？！

互いに顔を見交わす、隆太とその男。

「何でお前がここにいるんだっ！」

笹原 隆太！！

やっぱり、ついて来たんだな。でも……この展開は以外だったな
あ。

隆太は照れたような笑いを浮べた。

おっさん、名前は……山下慶一

社会が終わった後の廊下。隆太を山下がとっ捕まえる。

「こらっ、待てっ！俺にきちんと説明しろ」

「何だよ。もう、帰るんだから邪魔するな」

「帰るな！まだ、2時間目が終わったところだ」

「あんたなんか、知らない」

「しらばっくれるな！」

あの雪崩の後

何で俺は神室山（東北の）にいたんだ？

お前は何故、K2に現われた？
そして、

何で俺は生きてるんだ？！

“時の間を飛び越えてしまったんだよ”

え？山下の頭に響いてきた無言の声

「あの後、この学校の知合いに頼みこんで、先生の職を世話してもらったんだ。登山家の山下慶一の名は伏せて。その説明も四苦八苦だ。考えてもみるよ。K2で死んだはずの男が、3日もしないうちに日本にいるなんておかしすぎる」
まくしたてるように山下は言った。

「ほとぼりが冷めたら、俺は、またK2に登る。あの山で別れたパートナーの事が心残りでならないんだ」

しらばっくしてくれてるのも、面倒だな。ふうと一つ息を吐くと、隆太は笑った。

「おっさん、また、死ぬぞ」

「死ぬものか。K2の頂を俺はまだ、見ていない」

ふうん。なら、勝手にすればいいや。

「俺、帰るから。今日の給食は、一番まずい酢豚チャーハンなんだ」

廊下の窓からひゅうと秋風が飛びこんできた。舞いこんできた銀杏の葉がくるりと宙を舞った瞬間、目の前から突然、隆太がいなくなった。

「あいつ、堂々と消えやがった」

もう、驚く気にもなれない。山下は、苦い笑いを浮べると、次の教室へ歩き出した。

はらはらと舞う銀杏の間を縫うように、風が通り過ぎてゆく。

“山は人を拒まない。だから、人は山を目指すのか……”

時の間をすり抜けて

時の魔術師く秋く

- 完 -

く夏く

僕の名前は、笹原龍太。ささはら りゅうた 中学2年生。好きなものは学校給食、嫌いなものは学校活動。

今日は学校を休む事にした。なぜって、今日は、学校に行く意味がない。夏休みが明けたばかりの始業式で、給食もないからね。

通学路の近くの桜並木でごろんと寝転がる。今日はからりと晴れたいい天気だな。

「おい、龍太！行かないのか？遅刻するぞ」
お、同じクラスの村田だ。“行かないよ”僕はあっちへ行けとばかりに手を振った。

ちりん ちりん

どこかで風鈴の音がする。でも、風は秋風。9月って、本当に夏と秋が一緒にいる季節なんだな。

「龍太、先に行くぞ！」

村田の声が出たけど、完全に無視。学校で掃除するより、ここで蝉の合唱を聞いている方がおもしろい。

ちりん ちりん

だって、この音が、きっかけになる。

そして、

どこか別の季節へ

僕は飛べる

雲が流れてゆく。桜並木が風にゆれている。

それにしても、蝉の声って夏の終りが一番、激しくないか。

“ 蝉は土の中に幼虫で7年、そして地上で羽化して、生きられるのは、たったの7日 ” って、いつか誰かに聞いた事があった。

それが、本当なのは、別にして……

僕の足元に一匹の蝉がぽんと落ちてきた。なんか、いいタイミングで。

ジジジジ……

「お前、今日が地上に出て七日目か。あわれな奴」

蝉は、そんな言葉なんか聞きもしないで、羽を小刻みに震わせている。

でも、こいつにとっちゃ、あたり前の事なのか。あわれと思うのはごっちの勝手な想像か。

それでも……知っているのは夏の景色だけだろう？

七日だけの寿命を生きて、春に、この桜並木を彩る花の色を、知らないままに消えてしまう運命なんだ。

ちりん ちりん

- ほら、きつかけの風鈴の音 -

次が鳴ったら、

ちりん

“春風満桜”

僕が一番、お気に入りの染井吉野

この世で一番透明なピンクで染め上げて、
桜並木を満開の花で埋め尽くす。

僕が呼んだ“春”

ジジ……ジ、ジ……

景色はまた、夏。

足元の蝉は、かすかに鳴いた後に羽を止めた。

「あー、なんだか、つまなくなっただな。学校、行くか」
僕はよいしょと立ち上がった。

「あ、蝉、蝉っ！」

学校帰りの小学生が、地面に落ちた蝉に手を伸ばそうとしている。

「捕まえても無駄だよ」

「え、何で？」

「もう、死んでる」

「なんだ。つまんない。死んでるの」

「蝉は土に七年籠って、地上に出てから七日目に死ぬんだ」

「ふうん。でも、それって嘘だって先生が言ってたぞ」

「お前の先生って、つまんない奴だなあ」

いいんだよ。儂い命と思った方が、蝉時雨はきれいに聞こえるんだ

小学生は駆けて行ってしまった。僕が、ゆっくりと学校へ歩き出した時、

「おい、隆太！」

また、村田が来た。

「お前、まだ、こんな所にいたのか？学校、もう終わったぞ」

「なんだ。今から行こうと思ってたのに」

「遅えよ！」

村田と一緒に帰る道。明日からは給食が始まる。

「龍太、明日は学校に来いよ」

僕は微妙に笑って、こう答えた。

「それは、給食メニュー次第だよ」

時の魔術師

「時の魔術師」
く夏く
完

く春く

もろともに あはれと思へ 山桜

花よりほかに 知る人もなし

「村田……どうしたの？急に。気持ち悪っ！」

「何を言う！俺が唯一覚えた百人一首を」

「たったの一首！で、意味、わかってんの？」

「お互いに懐かしいと思ってくれ 山桜よ。花のおまえくらいしか、心をかよわす人がいないのだ」

聞えてきたおどけたような声に、村田ははっと後ろを振り返る。

石井美夏。この中学で毎年行われる“百人一首大会”のクイーンが現われやがった。

「ま、だいたい、そんなとこかな」

村田の尊大な態度に、美夏の友達のゆうちゃんが飽きたように言う。

「それで、何でその句をしみじみ、詠んでんの？今日は卒業式でしょ？ちつとも、時と場所に合っていないじゃん……しかも、オヤジっばい」

そう、卒業式。とはいっても、彼らは中学2年生。今日は、彼らの一つ上の学年、3年生の卒業式なのだ。

「だってなあ。バスケット部のキャプテンを見るよ。後輩たちに囲まれて、きやあきやあと……制服のボタンの争奪戦なんて、信じられない光景だ（俺にとっては）」

ゆうちゃんと、美夏は村田のつぶやきを聞くなり、急にぷつと吹き出してしまった。

「そっか、さつきの句って今の村田の心情？でも、悲しくない？桜くらいしか心を通わす人がいないなんて」

「失礼な奴だな！俺にだって親友はいるんだぞ」

その時、ひゅうと風が吹き、校庭に咲いた七分咲きの桜の花がはらりと空に舞いあがった。

「誰か呼んだ？」

突然、どこからともなく現われた少年。だが、村田、美夏、ゆうちゃんの三人はもう、驚きもしない。

笹原隆太。

同じ中学のクラスメート。でも、こいつが普通に現われたためしなんか無いんだから。

村田が当たり前のように、隆太に言う。

「あれ？お前、何で来たんだ？今日は卒業式で給食はないんだぞ」

隆太の好きなものは学校給食、嫌いなものは学校活動。

「だって、今日は紅白まんじゅうを配る日だろ？あれって美味しいよな」

「卒業式はまんじゅうの配布日か？」

え？違うのか？

悪びれる風もなく笑顔を作る隆太に、三人のクラスメートは、“はいはい”と、諦め気分で頷いた。

* * *

「おーい、そろそろ送り出しの時間だぞ。下級生はさっさと並んで花道をつくれ」

そう言って、体育館から出て来たのは、社会の臨時教師、山下慶一だった。

「相変わらず不必要にでかい声！」

美夏はゆうちゃん顔を見合わせくすりと笑ったが、山下がこちらを見た瞬間、

まずいっ！今日は笹原がいるんだった。

と、大慌てでそっぽを向いた。

「おつ、笹原じゃないか。今日は学校にいるんだな」

案の定、山下は嬉しそうにこちらへやってきた。何故だかしらないけれど、この教師は隆太を気に入っている。

「おっさん、まだ、先生やってんのか。また、K2に登るんじゃないかったのか」

隆太の言葉に山下はしつと言いつつ、いきなり隆太の頭を抱え込んで2mほど、皆から離れた場所に引きずっていった。

「俺の名はおっさんじゃない。それにK2の事は皆の前では言うな！」

実は山下は登山家で世界第二の高峰、K2の登頂中に遭難し、そ

の時不意に現われた隆太と一緒に時の間を乗り越えてしまったのだ。それ以来、彼は隆太たちの学校で臨時教師として、働きながら再びK2に登る機会をうかがっている。

（*注 詳しくは【時の魔術師〜秋〜】をお読み下さい）

笹原隆太…… K2にいた俺を一瞬で、日本の神室山に移動させた少年。一体、こいつは何者なんだ？ 普段はひょうひょうとして食べ物の話ばかりの奴なのに……。

「K2の氷の割れ目に落ちていった親友を探しにゆくんじゃないのか？」

「あの山の時間は、地上よりもゆっくり進むんだ。あせる必要なんかない。それに行くにしても今は金が足りん」

山下の言葉に隆太は人の悪い笑いを浮べて言った。

「ま、死んでても冷凍保存されるしな」

「こらっ、罰当たりな事を言うな！」

わかってるさ。あいつの魂はもうこの世にいない事くらい。

山下は少し笑って、隆太の頭を軽くこづいた。

「あゝあ、隆太を先生に拉致られたな。あんなにくっついちまっで、あの先生、隆太に気でもあるんかい」

遠巻きに隆太と山下の様子を見ていた村田が言う。

「まさか、気持ち悪い事言わないでよ」

「でも、もしかしたら……」

美夏が、少し不安げに言ったその時だった。

「笹原隆太って、顔は妻夫木くん似で、そこそこいいけど、えらい変わり者って噂じゃない」

妙にきつい口調の華やいだ雰囲気の卒業生が現れた。

「先輩！卒業おめでとうございます」

テニス部の先輩、工藤美咲の出現に美夏は笑顔で挨拶する。

「あんな変人と友達？辞めときなさいよ。それより、花道を通る時、お花は私にちょうだいね。他の人には絶対に渡しちゃだめだよ」

なれなれしく、美夏に話しかけてくる美咲の姿に、ゆうちゃんは村田にそつとつぶやく。

「この先輩……ずつと、美夏にべつたりで、すごく嫌。美夏が好きだった男子テニス部の先輩にちょっかい出したのも、美夏を独占したい為だったんだよ」

「へえ、それでよく石井は我慢してるなあ」

「美夏はそこんどこ、ちよつと鈍感なのよ」

はらはらと桜の花びらが舞う午後には、下級生たちが作った花道を通りぬけ、卒業生たちは校門を出て行く。

思い出をいっぱい胸に抱えながら……

「なあんて言っても、また、戻ってきて写真撮影とかするんだよなっ」

雰囲気ぶち壊しの村田の台詞に、美夏とゆうちゃんはあからさまに嫌な顔をする。

「あゝあ、せっかく、いい雰囲気に浸ってたのに。ほんと、デリカシーのない奴」

「俺だけにそんな事言つなよ。ほら、隆太なんか……」

村田の言葉に、隆太の方へ目を向けた美夏。

え、寝てるの？それも立ったまんま。

「笹原っ！校庭のまん中でそんな器用に寝ないですよっ」

「え？」

きよとんと目を開いた隆太のまわりで、散った桜の花びらが、くるりくるりとじゃれつくみたいに円を描いた。

「いけね、うっかり寝てた。やっぱり、春なのかなあ」

そろそろ、戻んなきゃいけない頃だよなあ……

隆太が、美夏に何か言おうとしたその時、校門の方から声がした。

「いやよ！行かないって行ってるでしょ！」

美夏の先輩、工藤美咲が車で校門に乗り付けてきた男子に腕をかまれている。

「何でだよ。卒業記念にドライブしようってんだぜ」

「だって、三浦くん、無免許でしょ！」

驚いて声のした方向を見た美夏は一瞬、口籠もってしまった。

「あいつ、知ってるぞ。高等部の三浦和也だ。たしかテニス部の……」

美夏たちが通っている学校は中高一貫の進学校だ。卒業といっても、ほとんどの生徒は同じ敷地内の高校に進む。

村田にゆうちゃんが相槌をうつ。

「そう、3年生の三浦さん。でね、あの人が例の工藤美咲がとったっていう美夏ちゃんの好きだった先輩なんだよ。かつこいって評判の人。でも、ちょっと見ないうちにすごく不良っぽくなっちゃって……」

そこに隆太が口を出してきた。

「ああ、あれが去年の夏休みに青い空と入道雲が、すごく綺麗だったにもかかわらず、学校帰りの堤防で石井をこっぴどく振っていやな気分にしたクラブの先輩か」

あまりにも詳しい隆太の情景描写に、村田とゆうちゃんはきょとんと目を点にした。

(*注 詳しくは【時の魔術師】く冬くをお読み下さい)

和也の手が無理やり、美咲を車に引きこもつとしている。

「美夏ちゃん、助けて！」

泣きそうな声で叫んだ美咲先輩を、放っておくわけにはゆかない。こんな時美夏はとてつもなく大胆になる。車に駆け寄ると美夏は美咲先輩の腕を強くつかんで引つ張った。ところが……

運転席の和也は、細く剃り上げた眉を大きくしかめた。

助手席にいる美咲。それにくつついてきた美夏は仕方ないとして、

「お前、何処からそこへ入った!？」

後部座席に一人陣取り、ゆうゆうと座っている少年。

“ 笹原隆太!”

「さ、ドライブ、ドライブ！」

戸惑う一同を気にもせず、

隆太は元気いっぱい笑顔を見せた。

「さつさと降りろよ！お前なんか乗せる気はない！」

「それより、車を止めてっ。無免許なんでしょ！」

「何でもいいから、スピード出すのはやめてええっ!！」

誰かれなしに叫ぶ声が、車内に響き渡る。

「……んなこといったって、止めれるかっ！」

「えっ、何で!?!」

「ブレーキが効かない」

「ええっ!」

「スピード出してんのは俺じゃなくって……」

和也はスピードに取られそうになるハンドルを必死で操作しながら叫んだ。

「この車が勝手に暴走してるんだっ!」

四人の生徒を乗せたシルバーメタルの車は、小気味よさげにきらりと輝くと、学園通りを爆走していった。不思議な事に、普段は交通量の多いこの道路が、今日は車どころか人つこ一人姿が見えない。

クスクス、クス……

後部座席で、楽しみに隆太が笑う。

「笹原っ!笑ってる場合じゃないでしょ。何とかなんないの?!」

助手席で美咲とぎゅうぎゅう詰めの状態からようやく後を振り返り、美夏はあせった声を出した。

「そんな事言ったって、僕は車なんか運転した事もない」

隆太はにこりと微笑んで前方を指差した。

「それより、前から来たトラックにぶつかるぞ」

嫌ああああっ!!

その瞬間、目のまわりに星屑が散らばった。

* * *

星空のバイパス、スカイウェイ。流星のように快走するシルバーメタルの車。波音が聞こえる。潮の香りが胸いっぱい広がってくる。

美咲と美夏は、車の窓を開け外の景色に見入った。

時間：夜。場所：海沿いの直線道路。季節：夏？

二人の意見はだいたい、こんな所で一致した。

でもこんな事って……私たちが、さつき卒業式を終えたばかりでしょ

……

時間も場所も季節も、全部が違ってる。

「……、何処？」

美夏の問いに、先ほどから運転ばかりに気をとられていた和也が、つぶやくようにこう言った。

「西湘バイパス。忘れるもんか、夏におやじと一緒にドライブした道だ。そして、その次の日にあいつはいなくなっちゃった」

「……」

腑に落ちない顔の美夏の耳元に美咲が囁く。

「和也くんのお父さん、夏に亡くなったのよ。事業に失敗して……自殺だったって。でもね、その後すぐお母さんは結婚して……で、彼は少しグレちゃったみたいよ」

ああ、そうか。と美夏の心にしょっぱい気持ちがかみ上げてきた。だから、先輩はあんなに変わってしまったのか。

西湘バイパス。神奈川県大磯町から小田原市までのほぼ大部分を海岸沿いを通る自動車専用道路。

「ああ、波の音が眠りを誘うなあ」

やっぱり、戻らないとなあ。

一人マイペースを決め込む隆太は、頭の後ろに両手をやると、つまらなそうにごろんとシートにもたれかかった。それから、窓の外に飛んでゆく海辺の景色に目をやった。

走る、走る、暴走する。

流星よりももっと、もっと早く走りたいんだ。

急いで、急いで、ただ急いで

時を早く駆けぬけてしまいたいんだ。

海岸道路を一直線に進んでゆくシルバーメタルの車。

「止めてよ!!」

「駄目だ。できない」

「そんな事ないでしょうがっ。ブレーキを踏んで。思いっきり踏みしめてっ!!」

「嫌だ、こんな場所では止まれない!!」

だが、突然煌いた赤い閃光が、4人の生徒たちの堂々巡りの会話を中断した。

対向車線でガードレールにぶつかった車が、激しく炎上している。窓の外を覗き込んだ美咲の瞳までが、赤く染まってみえるほどの激しい炎。

「事故?!」

すれちがいざまに、見た人の影。寄り添うように運転席にいる二人。

「炎の中に人がいる……黒い影が車の中で揺れてた」

ほんのその数秒が何十分にも思える長い瞬間。美夏は思わず顔を手で覆い、美咲の膝に身を隠した。

消防車とパトカーのサイレンの音がけたたましく響いてきた。そして、その時、ふいにカーラジオからニュースの音声が流れてきた。

7月23日 午前3時40分。西湘パイパス、大磯西インターチェンジ付近が事故がありました。この事故に17歳と16歳の男女が巻き込まれた模様、ただいま身元を確認中……

和也が苦々しい口調で言った。

「助かってないな。あんな凄まじい炎の中にいたんじゃない」

徐々に増えてくるサイレンの音が、五月蠅すぎて、耳を塞ぎたくなった。でも、ハンドルを手放すなんて、絶対できない。やったが最後、今度は、自分たちまでがスピードに巻き込まれてしまう。あんな事故の二の舞は御免だ。

「なら、車を止めればいいじゃないか？」

ふいに背後から聞こえてきた声。

「笹原……？」

「ブレーキを踏むだけなんて、誰にでもできる事だよなあ」

投げやりなその言葉。

なのに、その声は、無造作に胸の中に入ってきて、迷っていた心の鍵に手をかける。

思い立ったように和也は足をブレーキに置くと、それを思い切り強く踏みしめた。

こんな事ってあるんだろうか？

幻のように消えてしまったシルバーメタルの車と直線道路

暗い明かりのない海岸で、4人は漆黒の海を見つめていた。静寂の詰まった空間には、

わわわわ……わわわわと

波が運ぶ砂の音だけが響いている。

その中で目を凝らし

石井美夏、工藤美咲、三浦和也、そして笹原隆太が見つけたもの。

それは……

海の波間にほのかに灯る四つの漁火。

目が暗さに慣れてくると、漁火の灯の中に人の姿がぼうつと浮かんできた。

一つの漁火に一人の人影。
それが四つ。

白い木綿の上着を着て、腰には小さな竹籠をつけている。

わんわん……わんわん

幻影のような四つの姿は浅瀬の穏やかな波の中に、同じ間隔を開きながら横一列に立っていた……沖の方角に体を向けて。

そして、お互いの腰と腰を細い綱で結び、竹籠につけられた小さな漁火だけをたよりに静かに海をすくっているのだ。

海女……？海に潜ってはいないけど、多分、貝か海藻を採っているんだ。

話す事も、顔を見交わしさえしないで、波の中で、ただ黙々と、すくった何かを籠に運んでいる……。

漁火が波の上に四つの影を映し出す。そして波が動くことに、それらは沖へ流されてゆくのだ。

隆太を除く3人は、その光景に小さくため息をついた。

「まるで時間が止まったみたい……」

ぼつりとつぶやいた美咲に隣の和也が無言でうなずく。
だが、珍しいほど鮮明な笑顔で隆太が言った。

「違う。時は止まってなんかいやしない……緩やか過ぎるほど緩やかに、ここの時間は動いてるんだ」

そうして、遠い夜明けを待ちながら、海をすくい続けているんだよ。

あの人たちが持った、小さな漁火とお互いを結び合った細い綱

ちっぽけだけど、それがなければ、暗い海をさまようばかりだ。

「笹原、どうしたの？今日はいつになく真面目モード？」

美夏は不思議そうに隆太の顔を覗き込む。その台詞に美咲がくすりと笑った。

「そうやってると、笹原も男前に見えるよ」

もともと俺は男前だ。

ふつりとつぶやく隆太に、和也はちよつと眉をしかめた。

「さっきの事故の二人は時を早く駆けすぎたんだよ。けれども、この時間は遅すぎて、何だか哀しい感じがする」

隆太の言葉を待っていたかのように、空が白んできた。

それでも海の中あの人たちは、ただ、黙々と波の中に立ち続けているんだ。

夜明けがもう近いのに……

「あ……私、何か泣けてきた……」
知らず知らずのうちに、涙があふれ出て、美夏は思わず袖で顔をぬぐった。悲しさよりもほろ苦いような思いが胸いっぱい広がってしまったのだ。

急いで、ただ急いで
時を早く駆けぬけてしまいたいのか？

それとも、哀しいほどに緩やかに
夜明けを待ち続けるのか。

「俺は嫌だ……そんな風に生きるのは」
和也の声が響いたとたん、
ふわりと風が通り過ぎた。

時の魔術師

*

*

*

ちらちらと舞う桜の中で、美夏はきよとんと目を見開いた。

卒業式の後、写真撮影と雑談を終えた生徒たちが、次々と校門から出てゆく。

「帰ってきたみたい……」

美夏の呟きを聞いた美咲は、少し離れてたっている和也にいぶかしげな視線を送った。

夢？ううん。違うわ。和也の後ろに止まっているあの車、

あれは、確かに、私たちを乗せて西湘パイバスを爆走したシルバ―メタルの車だもの。

「美夏！美夏つたら、急にいなくなっちゃって何処へ行ってたのよ！？」

少し頬を膨らませたゆうちゃんが、村田をひきつれて、こちらの方へ駆けてきた。

「隆太は何処だ？親友の俺を置き去りにするなんて、そんなのアリか？」

だが、そう言ったとたん、村田は呆れ顔で近くにあった桜の木の下に目をやった。

「寝てやがる」

桜の木の根元に腰をおろして、すやすやと寝息をたてている隆太。

「おいっ、起きろよ、こんな所で寝るな」

村田がそう言った時だった。

「お前ら、何やってんだ？卒業式はもう終わったんだぞ」

校庭の方から、社会の臨時教師　・山下　・　　がやってきた。

“ヤバイ、車に乗ってきたのが見つかった”とつさに、美咲の後ろに身をを隠した和也だったが、もう遅かった。

「高等部の三浦和也……か。お前なあ、校内でやんちゃするだけなら、まだ情状酌量の余地もあるが、無免許運転は法律違反だ。日本全国、いや世界に出たってそれは罪だ！わかってんのか？警察に知れたら、お前、即退学！書類送検」

俯いた和也は山下を上目づかいに見た。でも、何も言葉が出ない。その時、美夏がぱっと目を輝かせ言った。

「そつだ！三浦先輩、車のキー持ってるよね。それを私に貸して！」
「そりゃ、持ってるけど、どうすんだよ？お前が運転するってか？」

“ 違つわよ ”

「はい、運転するのは、“先生”。免許証持っているんでしょ」

と、美香は受け取った車のキーを山下に向けて差し出したのだ。

「何?!……という事は、俺に三浦を家に送らせて、こいつの無免許運転は知らん顔をしとけつてもりなのか？」

美夏、美咲、とりあえずよく場面を把握できないでいたが、ゆうちゃんと村田……そして三浦和也。こくこくと、首を縦に振る5人。

「先生、頼むよ。俺、きちんと免許がとれるまではこの車は運転しない事に決めたんだ。髪の色ももとに戻すし、学校にもきちんとして来……退学なんて嫌だよ。俺はもつとじっくりとこの学校で、みんなと色んな事がやりたいんだ」

こいつ、何を言い出すかと思ったら、やけに真剣な目で

仕方がないかと、山下は、しぶしぶ首を縦に振った。

「わかった。キーを貸せ。でも、三浦、お前の家って何処なんだ？」
「大丈夫、車だったら、学校から30分」

「30分？帰りはどうすんだよ。俺はまた学校に戻んなきゃなんないんだぞ」

村田が言う。

「電車があるじゃん」

山下は惘然とした表情で言った。

「交通費出せよ」

うわっ、セコいっ！顔を見合わせ美夏とゆうちゃんは目と目で語りあう。

「……で、そこで寝てる笹原のことだが、それも、どうにかしておけよ」

桜の木の下の隆太を指差して山下が言う。

「だって、先生、さっきから何回も起こしてるのに、こいつ気持ち良さそうに眠ってるって全然起きないんだ」

「保健室にでも寝かせとけっ。俺が帰ってきてても寝てたら、たたき起こして帰らすから」

山下はそう言うのと、和也と二人でシルバーメタルの車を飛ばして行ってしまった。

「あれって、スピード違反じゃないの？」

美香とゆうちゃんが苦笑いを浮べる。

「じゃ、俺、隆太を保健室に連れてゆくわ」

よいしよと隆太を背中にしよって、歩いてゆく村田に美香とゆうちゃんが“ご苦労様”と声をかけた。その二人に美咲が言った。

「じゃ、またクラブでね。高等部になっても、クラブ交流はあるもんね」

それと、

今まで、わがまま言うてごめんね。

美夏はその笑顔に同じような笑顔で答えた。

* * *

保健室に続く廊下、隆太を背中にしよいながら、村田はふと窓から飛び込んできた桜の花に目をやった。
くるくると舞って隆太の頭に落ちてきたひとひらの桜。

もろともに あはれと思へ 山桜
花よりほかに 知る人もなし

ふと村田の心にそんな句が浮かび上がった

この句の意味って？何だっけ……

山桜よ。花のおまえくらいしか、心をかよわす人がいないのだ……

「桜しか心をかよわす人がいないなんて……そんな事ないよな」
村田は隆太の顔をちらりとうかがってつぶやいた。

「俺とお前は親友なんだろう？」

* * *

「まったく、無駄に時間をくっちゃまった」
和也を自宅まで送り届け、学校へ戻ってきた臨時教師の山下は小さく息をついた。もう時間は夕刻にせまり、校舎に人影は見当たらない。

そういえば、笹原はどうしただろう？

桜の木の下で眠り込んでしまっていた隆太。

村田に保健室に連れて行けと言っておいたが、まだ、そこにいるんだろうか？

何だかやけに気になって、山下は保健室へ向かう廊下を足早に歩いていった。

窓から1枚、また1枚と飛び込んできた桜の花びらが、くるり、くるりと舞いながら、その後を追う。

保健室の扉を少し開いた時、山下は一瞬、その手を止めた。

おかしい……この向こうの空気……何か、違う。

くるりと鼻先に舞い降りてきた桜の花びら。その瞬間、はっと目を見開き、山下は力まかせに保健室の扉を開いた。

「笹原っ！！」

桜、桜、桜の花が……！

保健室全部を薄桃色に染め上っている。
上下左右に乱舞する桜吹雪！

山下は啞然と、保健室の机に座って彼を見ている隆太の方に視線を移した。

「あれ、おっさん。何で来ちゃったんだよ」

「笹原！？お前、ここで何してるっ？！」

「何って、もう、戻るんだよ」

「戻るって何処へ！？」

山下の言葉に隆太は少し笑って言った。

“ 時の中心へ。時の彼方へ ”

「心配すんな、1年もすれば戻ってくるから。でも、本当は嫌なんだ。いつかは帰って来れなくなるから……その場所で時を見据える。それが、俺の仕事だから……」。

春を迎え、夏を過ごし、秋を羽包み、冬を見守る

四季の守人

桜色の空気が元にかえってゆく。それと共に隆太の姿も薄まり出した。

「い、1年たったら、戻ってくるんだな！？今回は戻ってくるんだな」

「もどってくるよ。まだ、俺はみんなと遊んでいたいから」

「1年後のいつ?!」

「1年後の春に」

こいつが普通じゃないのは、前からわかっていたんだ。けれども、こんな別れは御免だぞ。山下はまくしたてるように、大声で叫んだ。

「約束しろっ！必ず1年たったら、帰ってきてくると」

「約束？おっさんにしては、かわいい事を言うんだな。なら……」
「なら……？」

隆太の言葉に山下はぐつと息を飲み込んだ。
すると、隆太は鮮やかに笑った。

「時を止めておくよ。春のまま。次に帰ってくるその時まで」

お、おいつ、冗談じゃないぞ！時を止めてゆくんなんて、そんな事、
困る！

激しく舞い上がった桜吹雪。

クスクスクスと……

その中いっばいに広がった隆太の笑い声。

それが、やがて聞こえなくなった時、保健室には山下一人が取り残された。

人っ子ひとり、ひとひらの桜も残さずに……。

「行っちまいやがった……」

山下はただ、啞然と保健室の窓から暮れてゆく空を見つめていた。

* * *

夏

「結局、夏が来たじゃないか。笹原の奴、時を止めるなんて言いやがって」

葉桜になった桜の木でがなりたてるミンミン蝉が五月蠅くて、山下は眉間に皺をよせた。

「あ、先生。留学生のマイクがワングルサークルに入るってよ」

校庭の向こうから駆けてくる村田とゆうちゃんに山下は笑顔を作った。

「へえ？留学生か。誰でも大歓迎だ。これでメンバーが3人だな」

「美夏もテニス部と兼部してくれるかもしれないって」

今年、山下が、学校で発足させたワングルフォーゲルのサークル。といっても、メンバーはこれから集めるのだが。

「笹原が帰ってきたら、即入部させるしな」

と、村田が笑った。

「でも、俺はまだ信じられない。隆太に海外留学なんて似合わないすぎだ」

苦し紛れに言ったものの、やはり無理があつたかと山下は笑う。

村田たちと別れてから一人で校庭を歩いていると、他の生徒たちの声が山下の耳にふと響いてきた。

「この桜の木っておかしいんだよね。春からずっと上の方に1輪だけ、枯れない桜の花がついてるんだ」

「うっそお。誰かがいたずらで偽物をつけてんじゃないの」

「わざわざあんな高い場所に登ってまで？」

走り去る生徒たちを入れ替わるように、桜の木の下にやってきた
山下は真上を見上げて、にやりとほくそえんだ。

花よりほかに知る人もなし……

「そうか、あの桜の花の時だけをお前は止めていったのか」
葉桜の中に、鮮やかに映える薄桃色の桜の花。

季節は移り変わってゆく。そして、この日の時は夏。

【時の魔術師〜春〜】 完

く春く（後書き）

「時の魔術師」四部作 完結しました。

私は、他にも何作か小説を書いています。その中でもこの四部作は、非常に観念的で、特に第4部く春くは少し、分かりづらかつたかもしれませんが、西湘バイパスの事故や、漆黒の海にいた四人の海女の部分は、私が過去に見た実際の映像に少し脚色を加えた実話です。あまりにもその景色が幻想的だったものですから、これは、ぜひ小説という形にして残しておきたいと思った……それが、「時の魔術師」の中でく春くを最後にもってきた理由といったところでしょうか。

私的には、世界最高峰K2に笹原隆太が現れて、登山家の山下を神室山につれてきてしまいうく秋くが、隆太と山下の台詞の掛け合いなどを考えるのが楽しかったので、けっこう気に入っています。

また、機会があれば、番外編なども書いてみようと思っています。その際にはまたご一読いただければ幸いです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2393e/>

時の魔術師

2008年11月7日07時21分発行